

日時:①令和5年10月21日(土)午後6時30分から午後8時まで

②令和5年10月22日(日)午前10時30分から正午まで

場所:①②中央公民館

参加者:①12名、②9名

1. 福祉 SOS ゲーム

◆概要

「SOS」は、「S:社会資源」、「O:お悩み」、「S:相談」の頭文字を合わせたもの。様々な困りごとを抱える世帯のケースカードを見て、どうすれば困りごとを解決できるか社会資源が記載されたマップを見て考えるゲーム

2. 意見交換

◆テーマ1:普段の生活の中でちょっとできることを考える

参加者が認識している課題等		項目	ちょっとした支え合いの経験・提案
全体	井戸端会議等でそれぞれが抱えている課題がでることがある	提案	普段から気にかけてあげる。
			買い物等ちょっとしたお手伝いをしてあげる。
			互い負担にならないようなコミュニケーションをとる。
	地域とつながるきっかけ	経験	自宅でのガレージセールを通し、ポリビア人家族と話をするきっかけができた。いろんな形で接点を作ることが大切。
		提案	町内会が親睦のために行っているお祭りで、子ども神輿等を通し、子ども同士・親同士でコミュニティができるとよい。
	制度・相談窓口等	提案	相談先が分からなくても相談ができる「なんでもかんでも相談総合窓口」がほしい。 認知症サポーター養成講座等を手本として「お困りごとサポーター制度」等があるとよい。
高齢	孤独死	提案	新聞がたまっている、洗濯物を干していない、配食弁当が置きっぱなし等に注目しながら、近隣住民同士で見守りをしていく。
			ご近所同士での見守りや声掛けを行う。
	認知症	経験	道に迷っている方に声をかけたら、本人が町会に参加していたことにより身元が判明して無事に帰宅できた。
提案	友人の場合、安心して相談ができるよう、支援機関に付き添う。		
障がい	精神障がいの方の社会参加	経験	訪問対話サービスによる寄り添いにより、心が和らいた。
			ピアサポートを利用することで、より寄り添いが可能となる。
子ども	朝食を摂らない子が多い	経験	お寺に対応してもらい、朝食を提供する子ども食堂を開く。
子育て	親が怒鳴る等、子育てに苦労している	提案	いきなり踏み込まず、挨拶・声掛け等で仲良くなってから相談に乗る。
	子育て世代が行ける場所が少ない		さりげなく行政機関等の情報提供をする。 子育て世代と高齢者をつなぎ、交流できる場をつくる。
その他	当事者が課題として認識していない場合がある。		
	家庭で課題がもみ消される場合がある。		

◆テーマ2:若者のボランティアへの参加をどう促すかを考える

項目		意見・提案等
環境	ボランティア窓口等	ボランティアを推進する組織、窓口、責任者を明確にする。
		相談窓口や組織等のPRをする。
		ボランティアをいってもよいと思っている人向けの窓口を設置する。
		ボランティア団体のリストを作成する。
		インターネットで検索できる仕組みをつくる。
		マッチングができる機関、アプリ等をつくる。
	ボランティア先	ボランティア活動開始後の、伴走型支援や相談支援が必要である。
		ボランティアではなく「ちょっとできるお手伝い」等ニュアンスを変え、やわらかい印象にする。
		ボランティアのハードルを下げる何らかの工夫をする。
		グループやチーム、友人同士等集団で参加できる仕組みをつくる。
	その他	長期継続的なボランティア活動ではなく、スポットでやりたい時には気軽な活動に参加できる機会をつくる。
		子ども主体で運営する「子ども町内会」をつくり、自分達でまちをよくしていく経験や達成感が得られる環境をつくる。
きっかけ	学校	町会お掲示板にポスターを掲載する等、若い人に地域の支援ニーズを伝える機械を増やす。
		学校からボランティア活動を行うことを推進してもらう。
		学校のボランティア部の活動を活発化させる。
		学校への出前講座等でボランティア活動に関する情報を伝えていく。
		授業の一環としてボランティア活動を行い、単位取得できる仕組みをつくる。
	興味	大学の就職支援センター等で適性を見つける手段・方法としてボランティア活動を取り入れる。
		子どものフットワークの軽さや何かをやりたいという好奇心を活かす。
		自分の専門や得意分野を活かしたボランティア活動の情報提供をする。
	自分に役立つ	楽しみながらできる内容(関心・興味の高いもの)であれば活動しやすい。
		ボランティア活動を通し、役に立てたという経験ができるようにする。
		履歴書等に「ボランティア歴」の項目があれば、就職や転職の際のインセンティブとなるため、参加のモチベーションにつながる。
		ボランティアポイント制度を導入し、少額であっても報酬があると始めやすい。(入口は見返りがあってもよい)
	その他	ちょっとした声掛けだけでも、困っている人が助かることがあると分かると、自己肯定感につながる。
		子どもの参加には母親が大きく影響する。母親世代のコミュニティを構築することで、参加につながりやすくなる。
		仲間同士で声掛けしあい、集団でボランティア活動を行う。
	その他	ボランティアに対する正しい知識の普及啓発を行い、参加につなげていく。
		メディアで報道されている災害ボランティアと地域のちょっとした支え合いボランティアは違うものとの認識がある。
		災害ボランティアはイメージしやすいが、地域の支え合いはイメージがしにくい。
市内の困っている人に対する支援ニーズに関して若者に伝わっていない。		
農協では子ども食堂に農作物の提供とする等、地域貢献として何かができるか検討している。農業体験を通して集まりやつながりの機会となる。		
幼い子どもを1~2時間預かってもらうことで、親がリフレッシュできる機会があるとよい。若者も子どもと触れ合うことでよい経験となる。		
こまちは地域の居場所になっている。参加者が話をして感情をはきだす良い機会となっている。大学生や保育士も参加している。空家を地域に開放していて、良いサイクルができています。		
ボランティアを経験することで、地域にとどまる可能性がある。		